

論文提出者氏名 山口 智弘

本論文「徳川中期における古典解釋學と思想 ― 伊藤仁斎 と荻生徂徠 ―」は、18 世紀前半に向け思想家・学者として一般に注目されて来た伊藤仁斎および荻生徂徠について、漢籍としての「古典」の解説を行った両者の学問的作業に含まれた思想形成の過程を踏み込んで捉える。近世日本では出版・流通と結び付いたテキスト運動が、易や宋明学とも関係して大きな現象として発生する。本論文は、その内、漢籍において「古代」を遡及するいわゆる古学者、仁斎・徂徠を捉える。従来、この二つの思想家は、重要な学者として長く関心が注がれて来た。ただ、これまで、既に形成され体系化された学の構造自体をとらえる傾向があり、また形成過程を見るにしても宋明学からの変化あるいは日本化などと大掴みにとらえる傾向があった。またそこにある言語・翻訳には注意が持たれても、形成の動的な在り方そのものはまだ十分把握されてはいなかった。これに対して本論文は、従来の視野から落ちていた多くの写本や断片的な印刷にまで注目し、仁斎・徂徠の思想形成の経緯をより具体的に捉えていく極めて文献実証的な思想史研究である。

本論文は、序・予備考察で、古代・中世から徳川前期に至る学問過程に宋明理学の介入があり、これが近世の学問（修学）となったことを位置付ける。そして前編「語孟古義の探究と仁斎学の形成」では、学問的時代状況をテキスト解釈としてまず大きく担った論者といえる伊藤仁斎を扱う。第一章「仁斎初期論説から三書古義現存最古稿本への展開」では、三十代の仁斎において、仏教・老莊思想への接近と離脱が、『論語』『孟子』『中庸』三書への注目と程朱学への疑義と反発となった。そこに「理」に位置付かない「心」の探究があり、また「生」や「感応」があった。それらが二書としての『論語』『孟子』の「古義」に至った、という。

第二章「叙由と仁斎注釈―『孟子古義』を中心に」では、論語だけでなく孟子をも重んずる伊藤仁斎の孟子解釈に注目する。仁斎は仁義・王道を重視しこれを「心」よりも「人」の問題と捉える。それが民の保全へと向かい、そこに次第に理路を備えた体系化への考証学の態度があった、と指摘する。第三章「仁斎による『論語』重複章の探究」では、仁斎が、仁・義・孝などの徳目を、朱熹たちのように完全性への合一ではなく、分化された在り方における具体的な実践として捉えており、そこに意志・継承があった、という。

第四章「仁斎学における修為の行方」では、以上をまとめつつ、修為を梓づけるものとしての簡素な「礼」、根本的な「仁」、出处進退をめぐる「義」があり、それがまた天下への中庸でもあるなど総体的な形態をとらえる。また、この仁斎の思考が、唐虞三代と関係する「天下安穩」の姿でもあったと結論する。

後編「荻生徂徠の六経研究と思想形成」では、元禄期以後の荻生徂徠が、こうした仁斎を一旦は尊敬し継承しながらも、これに対して批判を強く持ちやがて論説を大きく形成してゆく様相を捉える。第五章「徂徠学の形成と伊藤仁斎」では、従来殆ど扱われて来なかった徂徠の『読荀子』『読韓非子』を解説し、そこに礼楽重視また「氣質の性」理解があり、仁斎への同感でも

あった、と捉える。しかし、刊行された『護園随筆』また自筆の『護園十筆』では、仁斎批判がより鮮明に出て来る。徂徠は、仁斎の活物観を始めとする諸概念が朱熹に既にあったものと仁斎の独自性を批判しつつ、彼自身は、礼楽をより重視し始めまた「論孟」ではなく「六経直読」の考えを展開し始める。第六章「六経解説と『論語徴』」では、徂徠が書籍の断片を実践的な通路において名と物の一致を計る態度・運動となり、そこから孔子の屈折と共に作者としての先王・聖人の位置付けとなっていく。そこでは六経とその意義を明かす論語という相互関係が捉えられた、という。

第七章「徂徠による『尚書』解説」では、従来殆ど読まれて来なかった草稿『尚書学』また「稽古釋義」(尚書堯典の解説)を捉える。これらは資料としては断片的である。しかし尚書は、徂徠にとって六経のうち最も高尚なものであった。そこに「敬天」観と「文なる道」があり、後の徂徠学の諸相の基本となる構造が本書に見出される。第八章「徂徠の「安天下」構想と唐虞」では、七章までの徂徠の儒学とくに「仁」「義」が、テキスト内部から如何に成り立ったかを捉える。「仁」が、『随筆』『十筆』にも見え『尚書』とも繋がる唐虞三代観、職掌観また天からの委任といったから来ること。また「義」が、それらへ参画する存在理由となり、「稽古」に拠って支えられること、が捉えられる。「結」は本稿全体のまとめである。

以上の本論文の内容は、これまで最終的な仁斎学・徂徠学の構造だけで見出される傾向があった彼らの活動を、実際の交流・表現に踏み込んで追求するものである。仁斎における心学からの実学への変化は、後者のみ捉えられる傾向があった。また徂徠学は、朱子学から突然の飛躍のように捉えられ、ただ『政談』『太平策』などで補われる傾向があった。これに対して、本論文は、これまで見過ごされて来た漢文資料の中に要点があるとその位置を示す。仁斎学・徂徠学の漢籍としての運動を良く捉えたもの、といえる。

確かに従来視点から外されていた資料を採り入れてプロセスを示すことは意義がある。經典、刊本、多くの校本などをよく調べている。しかし本論文は、仁斎・徂徠の晩年また継承者における「完成形態」が余り述べられていない。その前に止まって調査を記録した印象を与える。また時代状況・コンテクストが余り触れられておらず、仁斎・徂徠それぞれの京都・江戸、元禄・享保など時・処、また両者の関係が、余り見えない。宋明儒学からの変容であるなら、理・気・性などの諸概念や選択する經典の変化を捉え、また科挙が無い武家による政治支配などのコンテクストをも踏まえるべきである。また彼ら以後の状況、例えば詳細な儒学の展開あるいは国学への融合なども位置付けるといい。「古典」というのなら、それら歴史的な位置を示すことも必要だろう。少なくとも徂徠学からの「遊び」あるいは「国学」との関係などは触れるべきである、といった指摘がなされた。執筆者は、仁斎学・徂徠学の全体と大きく関係づける前に論を止めている。また実際の作業としては、契沖、景山や宣長国学などへの研究を展開しているが、これらと関連付ける前にやはり筆を置いている。この遠慮は、今後、東アジア的な視野も持ちつつ乗り越えられるべきものだろう。

ただ、本論自体は、従来、無視されて来た重要な空白点に深く踏み込んでプロセスを見出したものとして高く評価できる。ここにある実践的な経験論また理念としての古典といった問題の把握は、今後とも意義が大きい。これは以後さらなる研究の課題を示す発見でもあり、本論文の学術的意義は大きい。本論文は、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものであると審査委員会の委員は一致して認定した。